

# 無題のム

原作：太宰治「ロマネスク」「葉」より

脚色・演出：広田淳一

## 【登場人物／配役】

※配役は物語のパートごとによって変化する。

台本では便宜上、初演時の俳優の名前を使って「語り手」と代わりとしている。

仙術太郎

太郎 ……中村早香

惣助 ……曹成河

語り手 ……齋藤陽介

……高橋恵

……椎名りお

喧嘩次郎兵衛

次郎 ……曹成河

逸平 ……高橋恵

語り手 ……中村早香

……椎名りお

……齋藤陽介

嘘の三郎

三郎 ……齋藤陽介

黄村 ……曹成河

語り手 ……中村早香

……椎名りお

……高橋恵

## 『葉』

男 ……広田淳一

女の子 ……山田真由

1人の男が入ってくる。

彼の服装は貧しいながらも妙な洒落心を感じさせる、かといって全く洗練されたところのない様子。

おもむろに原稿を取り出して、いつしかペンを走らせる。

音in。

男

ことし、十二月下旬の或る霧のふかい夜に、日本橋のたもとで異人の女の子がたくさん

の乞食の群れからひとり離れて佇んでいた。花を売っていたのはこの女の子である。三日ほどまえから黄昏時になると一束の花をもってここへ電車でやって来て、東京市の丸い紋章にじゃれついている青銅の唐獅子の下で、三四時間ぐらい黙って立っているのである。いま、この濃霧の中で手袋のやぶれを気にしながら花束を持って立っている小さな子供を見ても、おおかたの人は女の子に就いてのふかい探索をして見ようとは思わない。

しかし、誰かひとりが考える。なぜ、日本橋をえらぶのか。こんな人通りのすくないほの暗い橋のうえで、花を売ろうなどというのは、よくないことなのに、——なぜ？ その不審には、簡単であるが頗るロマンチックな解答を与え得るのである。それは、彼女の親たちの日本橋に対する幻影に由来している。ニホンでいちばんにぎやかなよい橋はニホンバンにちがいない、という彼等のおだやかな判断に他ならぬ。

女の子の日本橋でのあきないは非常に少なかった。第一日目には、赤い花が一本売れた。お客は踊り子である。踊りは、ゆるく開きかけている赤い蕾を選んだ。「咲くだろうね」と、乱暴な聞き方をした。女の子は、はっきり答えた。

女の子

咲キマス

音out。 照明変化。

女の子

咲キマス。

踊子

随分自信があるんだね。

女の子

花ハ咲クモノデス。

踊子

咲かない花だってあるでしょう。

女の子

オヤ、生活ニ疲レテイマスネ。

踊子

ジンセイもう一回あればうまくやるんだけどねなにもかも。

女の子

なにもかも。

踊子

もっと若い頃からオーディションをいっぱい受けて、生れたらすぐにバレエを始めてさ

女の子

ナンナラ、ヤリナオシマス？

踊子 あー、そうだね。できるもんならやり直したい。  
女の子 ……できますよ。

踊子 へー、どうやって？

女の子 コノ花ガ咲ケバ。赤い蕾が開いたらそれが貴方のもう一回。花と交代にあなたが蕾にも

どります。そうしてそこからやりなおし。ただし、お望みどおりとはかぎりません。ヤ  
リナオシマス？

踊子 やりなおせるんなら、なんだっていい。もう男だっていい。

女の子 後悔しませんね。

踊子 もうしてる。

女の子 では、蕾が開くのを待っていてください。

踊子 花屋さん魔法使いみたいね。

女の子 魔法じゃありません、仙術です。

踊子 仙術？

女の子 ジャンプ

場面転換。

仙術太郎

高橋 仙術

陽介 仙術

高橋 仙術

陽介 仙術

高橋 せ

陽介 ん

高橋 じゅ

陽介 つ

二人 仙術太郎。

陽介 むかし津軽の国神かなぎ柳木村に

高橋 鍬形くわがた惣助という庄屋がいた。四十九歳で、はじめて一子を得た。

陽介 男の子であった。

高橋 「太郎」と名づけた。

陽介 生れるとすぐ大きなあくびをした。

高橋 太郎は母者人ははじゃひとの乳房ちゅうぶにもすすんでしゃぶりつくようなことはなく、母者人のふところの  
中において口をたいぎそうにあけたまま乳房の口への接触をいつまでも待っていた。

陽介 朝、

高橋 眼をさましてからもあわてて寝床から這い出すようなことはなく、二時間ほどは眼をつぶって

陽介 眠ったふりをしているのである。

高橋 三歳のとき鳥渡ちよつとした事件を起し、そのお陰で鍬形太郎の名前が村のひとたちのあいだに少しひろまった。

村人たち出てきて、

椎名 ちよつと聞いたー？

陽介 全然わかんない、誰なのあれ、ね、誰なの、誰なの？

曹 鍬形太郎

椎名 鍬形太郎

三人 鍬形太郎！

高橋 それは新聞の事件ではないゆえ、それだけほんとうの事件であった。太郎がこんな話聞いたこともないわよ！

高橋 どこまでも歩いたのである。

音in

曹 春のはじめのことであった。

陽介 夜、

曹 太郎は母者人のふところから音もたてずにくろがり出た。ころころと土間へころげ落ち、それから戸外へまろび出て、しゃんと立ちあがったのである。誰も知りませんでした。

高橋 満月が太郎のすぐ額のうえに浮かんでいた。

陽介 満月の輪郭はにじんていた。

高橋 満月の輪郭は

陽介 にじんていた。

椎名 太郎は歩きました。太郎は、

高橋 はだしのままで村の馬糞だらけの砂利道を、

陽介 ねむたげに眼を半分として小さい息をせわしなく吐きながら、

椎名 歩きました。

高橋 あくる朝、村は騒動であった。三歳の太郎が村からたっぷり一理もはなれている湯流山ゆながれやまの、林檎畑のまんまなかでこともなげに寝込んでいたからであった。

口々に静かにするように「しー」

高橋

発見者である蕨取りの娘の手籠てかごにいれられ、ゆられゆられしながら太郎は村へ帰って来た。手籠ののなかを覗のぞいてみた村のひとたちは皆、

椎名

天狗？

陽介

天狗？

三人

天狗じゃー。

曹

とうなずき合った。

陽介

惣助はわが子の無事である姿を見て、

惣助

これは、これは、

陽介

と言った。

惣助

困った

陽介

とも言えなかったし、

惣助

良かった

陽介

とも言えなかった。

母者人

良かったー。すいません本当にもオ。

惣助

太郎、何見た。太郎、何見た。

陽介

すると太郎は、

太郎

タアナカムダアチイナエエ

陽介

という片言を叫んだ。

惣助

なんだって？

太郎

タアナカムダアチイナエエ

惣助

タアナカムダアチイナエエ？

母者人

なんだ、それは？ 何を見たんだ太郎？  
なにも見ちゃいませんよ。

陽介

惣助は夜、寝てからやっとこのかたこの意味をさどった。

惣助

たみのかまどはにぎわいにけり。

総員

発見！

陽介

惣助は考える。

惣助

庄屋のせがれは庄屋の親だわ。三歳にしてもはや民のかまどに心をつかう。この子は湯流山のいただきから神榎木村の朝の景色を見おろしたにちがいない。そのとき家々のかまどから立ちのぼる煙は、はやはやとにぎわっていたとな。あら有難の光明や。この子はなんと授かりものじゃ。御大切にしなければ。

母者人

……うるさい（寝言）

高橋

母者人は寝相がわるかった。

惣助 (小声で) これは太郎の産みの親じゃ。御大切にしなければ。

高橋 太郎の予言は当たった。そのとしの春には村のことごとくの林檎畑にすばらしく大きい薄紅の花が咲きそろうい、

陽介 十里はなれた御城下町にまで匂いを送った。秋にはもっとよいことが起った。

高橋 林檎の果実が手毬くらいに大きく珊瑚さんごくらいに赤く、桐きりの実みたいに鈴成りに成ったのである。こころみにそのひとつつをちぎりとり歯にあてると、

椎名 果実の肉がはち切れるほど水気を持っていて歯を当てたとたんにはぼんと音高く割れ、冷たい水がほとばしり出て鼻から頬までびしょ濡れにしてしまうほどでした。

ババ 歯がない場合は？

陽介 たみのかまどはにぎわいはじめた。

曹 惣助は予言者としての太郎の能力をしかと信じた。けれどもそれを村のひとたちに言いふらしてあるくことは控えた。

高橋 親馬鹿という嘲笑ちやうしやうを得たくない心からであろうか。…ひよっとすると何かもつと軽はずみな、ひともうけしようという下心からであったかも知れぬ。

陽介 幼いころの神童は二三年して邪道におちた。いつしか太郎は、村のひとたちからなまけものという名前をつけられていた。

椎名 太郎は六歳になっても七歳になっても野原や田圃たんぼへ出て遊ぼうとはしませんでした。なぞなぞが好きでした。

太郎 水のなかにはいっても濡れないものはなんじゃろ

惣助 んー…判らぬの、

太郎 (ものうそうに眼をかくくとして)、影じゃがのう。

惣助 これは……これはまさか……

母者人 なんですか？

惣助 馬鹿ではないのか。阿呆なのにちがいない。

母者人 太郎ちゃん向こういってなさい。

惣助 村のひとたちの言うように、やっぱしただのなまけものじゃったわ。

陽介 太郎が十歳になったとしの秋、

高橋 村は大洪水に襲われた。

SE、 蛇口を捻る音？

陽介 村の北端をゆるゆると流れていた三間ほどの幅の神榑木川が、ひとつき続いた雨のために怒りだしたのである。

高橋 水源の濁り水は大渦小渦を巻きながらそろそろふくれあがって六本の支流を合わせてたちまち太り、

陽介 身を躍らせて山を韋駄天いだてんばしりに駆け下りみちみち何百本もの木材をかさらい川岸の榿かしや榿もみや白楊はこやなぎの大木を根こそぎ抜き取り押し流し、麓ふもとの淵ふちで澱よじんで澱んでそれから一挙に村の橋に突きあたって平気でそれをぶちこわし土手を破って大曹のようにひろがり、家々の土台石を舐め豚を泳がせ刈りとったばかりの一万にあまる稲坊主を浮かせてだぶりだぶりと浪打った。

高橋 それから五日目に雨がやんで、十日目によく水がひきはじめ、二十日目ころには神榑木川かななぎは三間ほどの幅で村の北端をゆるゆると流れていた。

陽介 村のひとたちは毎夜毎夜あちこちの家にとかたまりずつになって相談し合った。「だから結論としてはあれじゃつまり」

村人 で、嘉兵衛どんはどう思う？

中村 おらは飢え死したくねえじゃ。

村人 おらも

村人 おらも

村人 おらもじゃあ。

陽介 その結論はいつも相談の出発点になった。翌る夜、「だから結論としてはあれじゃつまり」

村人 で、嘉兵衛どんはどう思う？

中村 おらは飢え死したくねえじゃ。

村人 おらも

村人 おらも

村人 おらもじゃあ。

陽介 そして翌る夜は更に熱を入れてとことん議論を尽くした。飢え死にはともかくとしてまずは畑から水をどかさなけりや、なあ嘉兵衛どん？

中村 おらは、飢え死したくねえじゃ。

村人 おらも

村人 おらも

村人 おらもじゃあ。

陽介 相談は果つるところなかったのである。



高橋 村が乱れて義民があらわれた。或る日、  
陽介 十歳の太郎が、父親の惣助にむかって意見を述べた。

太郎 これは簡単に解決がつくと思う。お城へ行ってじきじき殿様へ救済をお願いすればいいのじゃ。おれが行く。

高橋 惣助は、  
惣助 やあ、

高橋 と突拍子もない歓声をあげた。けれどすぐに、  
惣助 いやいやいやいや、なにをいうか。お前は子供だからそう簡単に考えるけれども、直訴はまかりまちがえば命とりじゃ。めっそもない。やめろやめろ。

高橋 その夜、太郎はふところ手してぶらっと外へ出て、そのまますたと御城下町へ急いだ。

椎名 誰も知りませんでした。

陽介 直訴は

太郎 タノモー。

陽介 成功した。

惣助 やあ。

陽介 命をとられなかったばかりかごほうびをさえ貰った。村はおかげで全滅をのがれ、あくる年からまたうるおいはじめたのである。

曹 村のひとたちは二三年のあいだは太郎をほめていた。

陽介 が、

曹 二三年がすぎると忘れてしまった。庄屋の阿呆様とは太郎の名前であった。

陽介 太郎は毎日のように蔵の中にはいつて惣助の蔵書を手当たり次第に読んでいた。

曹 ときどき怪しからぬ絵本を見つけた。

陽介 それでも平気な顔して読んでいった。そのうちに、仙術の本を見つけたのである。

高橋 仙術？

陽介 仙術

高橋 仙術

陽介 仙術

高橋 せ

陽介 ん

高橋 じゅ

陽介 つ

高橋 これを最も熱心に、縦横十文字に読みふけた。

太郎 蔵の中で一年ほども修行して、ようやく鼠と鷲わしになる法を覚えこんだ。鼠になって蔵の中をかけめぐり、ときどき立ちどまってちゅうちゅうと鳴いてみた。鷲わしになって、蔵の

窓から翼をひろげて飛びあがり、心ゆくまで大空を逍遙しやうようした。ほどなく、かまきりになる法をも体得した。

けれど、これはただその姿になるだけのことであって、べつだん面白くもなんともなかった。

陽介はもはやわが子に絶望していた。それでも負け惜しみしてこう母者人に告げたのである。

惣助　な、余りできすぎたのじゃよ。

椎名　太郎は十六歳で恋をしました。相手は隣りの油屋の娘で、笛を吹くのが上手でした。

椎名　太郎は蔵の中で鼠のすがたをしたままその笛の音を聞くのが好きでした。

太郎　あわれ、あの娘に惚れられたものじゃ。津軽いちばんのよい男になりたいものじゃ。

陽介　太郎はおのれの仙術でもって、よい男になるようになるように念じはじめた。十日目にその念願を成就することができたのである。

高橋　太郎は鏡の中をおそろおそろ覗いてみて、あ！　おどろいた。色が抜けるように白く、

頬はしもぶくれでもち肌であった。眼はあくまでも細く、口髭くちひげがたらりと生えていた。

陽介　天平時代の仏像の顔であって、しかも股間の逸物いせつぶつまで古風にだらりとふやけていたのである。

高橋　仙術の本が古すぎたのであった。

太郎　このような有様では詮せんないことじゃ。やり直そう。

高橋　ふたたび法のよりをもどそうとしたのだが、駄目であった。

陽介　太郎は三日も四日も空しい努力をして五日目にあきらめた。

高橋　仙術の法力を失った太郎は、しもぶくれの顔に口髭をたらりと生やしたままで蔵から出て来た。

惣助　なにやつ

太郎　太郎です！

両親　…やあ！

陽介　あいた口のふさがらずにいる両親へ一部始終の訳をあかし、ようやく納得させてその口を閉じさせた。

太郎　このようなあさましい姿では所詮、村にも居られませぬ。（けれども世の中には物好きが居らぬものでもあるまい）。旅に出ます。

陽介　夜、

高橋 そう書き置きしたためて、飄然<sup>ひょうぜん</sup>と家を出た。

陽介 満月が浮かんでいた。満月の輪郭は少しにじんんでいた。空模様のせいではなかった。空模様のせいでは

高橋 なかった。ふらりふらり歩きながら太郎は美男というものの不思議を考えた。

太郎 むかしむかしのよい男が、どうしていまでは間抜けているのだろう。そんな筈<sup>はず</sup>じゃないのじゃがのう。これはこれでよいのじゃないか。

高橋 けれども、このなぞなぞはむずかしく、御城下町へたどりついてても、津軽の国ざかいを過ぎててもなかなか解決がつかないのであった。

陽介 ちなみに太郎の仙術の奥義は、懐手して柱か塀によりかかりぼんやり立ったままで、面白くない、面白くない、面白くない、面白くない、面白くない

陽介 という呪文を何十ぺん何百ぺんとなくくりかえしくりかえし低音でとなえ、ついに無我の境地にはいりこむことになったという。

高橋 面白くない。

面白くないの感染。曲あり。



中村 人  
椎名 か  
二人 喧嘩次郎兵衛。  
椎名 むかし東曹道三島の宿に、  
中村 鹿間屋逸平という男がいた。曾祖父の代より酒の醸造をもって業なりわいとしていた。  
椎名 酒はその醸造主じょうぞうしゅのひとつがらを映すものと言われている。  
中村 鹿間屋の酒はあくまでも澄み、なかなか辛口であった。  
椎名 酒の名は、水車みずぐるまと呼ばれた。お味は？  
中村 あ、おいしいです。  
椎名 子供が十四人あった。  
中村 男の子が六人。  
椎名 女の子が八人。  
中村 長男はおのれの思想に自信がなく、ときどき父親にむかって何か意見を言いたすことがあったけれども、  
高橋 そうかとも思われますが、しかしこれとても間違いだらけであるとか思われませんか、きつと間違っていると思えますが父上はどうお考えでしょうか、なんだか間違っているようでございます。――  
中村 言葉のなかばでもはや丸つきり自信を失い、言いにくそうにその意見を打ち消すのであった。逸平は簡単に答える。  
逸平 間違つとるじゃ。  
椎名 けれども次男の次郎兵衛となると少し様子がちがっていた。彼の気質の中には政治家の泣き言の意味ではない本来の意味の是々非々の態度を示そうとする傾向があった。  
中村 それがために彼は三島の宿のひとつたちから、  
宿のひとつ ならずもの！  
中村 と呼ばれて不潔がられていた。  
陽介 次郎兵衛は商人根性というものをきらった。  
次郎 世の中はそろばんではない。働かないものこそ貴いのだ。オウエー。（ゲロを吐く）  
陽介 そう確信して毎日のように酒を呑んだ。  
椎名 来る日も来る日も次郎兵衛は三島のまちを呑みあるいていたのであったが、  
次郎 オウエー  
椎名 父親の逸平は別段それをとがめだてしようとしなかった。  
逸平 あまたの子供のなかにひとりくらの馬鹿がいたほうが、かえって生彩があつてよい  
椎名 頭の澄んだ男であつたからである。

中村 逸平は三島の火消しの頭をつとめていたので、ゆくゆくは次郎兵衛にこの名誉職をゆずってやろうというたくらみもあり、遠い見透しから、次郎兵衛の放埒ほうちやうを見て見ぬふりをしてやったわけであった。

逸平、次郎兵衛の肩を軽くたたき。

逸平 見てないぞ。

陽介 次郎兵衛は二十二歳の夏にぜひとも喧嘩の上手になってやろうと決心したのであったが、それはこんな訳からであった。

音三。遠くから祭囃子。

中村 三島大社では毎年、八月十五日にお祭りがあり、宿場のひとたちは勿論、沼津の漁村や

伊豆の山々から何万という人がてんでに団扇うちわを腰にはさみ大社さしてぞろぞろ集まって来るのであった。

椎名 三島大社のお祭りの日には、きつと雨が降るとむかしのむかしからきまっていた。三島のひとたちは派手好きであるから、その雨の中で団扇うちわを使い、踊屋台おどりやたいがとおり山車だしがとおり花火があがるのを、

SE、もしくは花火の生音。

椎名 びっしょり濡れて寒いのを堪えに堪えながら見物するのである。

陽介 次郎兵衛が二十二歳のときのお祭りの日は、珍しく晴れていた。青空には鳶とびが一羽びよろびよろ鳴きながら舞っていて、参詣さんげいのひとたちは大社様を拜んでからそのつぎに青空と鳶を拜んだ。ひる少しすぎたころ、だしぬけに黒雲が東北の空の隅からむくむくあらわれ二三度またたいているうちにもはや三島は薄暗くなってしまい、水気をふくんだ重たい風が地を這いまわるとそれが合図とみえて大粒の水滴が天からばたばたこぼれ落ち、やがてこらえかねたかひと思いに大雨となった。

SE、もしくは生音の雨。

陽介 次郎兵衛は大社の大鳥居のまえの居酒屋で酒を呑みながら、外の雨脚と小走りに走って通る様々の女の姿を眺めていた。そのうちにふと腰を浮かしかけたのである。

娘が見える。

陽介 彼の家のおむかひに住まっている習字のお師匠の娘であった。赤い花模様の重たげな着物を着て五六歩はしってはまたあるき五六歩はしってはまたあるきしていた。

(次郎兵衛は居酒屋ののれんをぱとはじいて外へ出て、) 雨の音が大きくなる。

次郎 傘をお持ちなさい。

娘は立ちどまって細い頸をゆっくりねじ曲げ、次郎兵衛の姿を見るとやわらかいまっ白な頬をあからめた。

次郎 着物が濡れると大変です。ちょっとお待ちよ。

次郎兵衛店の中にはいり、

次郎 おい、親爺、傘だ、番傘一本出してくれ、誰が使うっておれだよおれ。なに、返すよ、馬鹿野郎。ちかいうちにすぐじゃ、早くしろ。

亭主、奥へ傘を取りに行く。次郎兵衛、それを待っている間に独り言。

次郎 やいお師匠さんの娘。おまえの親爺にしるおふくろにしる、またおまえにしる、おれをならずものの呑んだくれのわるいわるい悪者と思っているにちがいない。ところがどうじゃ。おれは、ああ気の毒なと思ったならこうして傘でもなんでもめんどろしてやるほどの男なのだ。さまを見ろ。おう、ありがとう。

次郎、亭主から傘を受け取る。ふたたびぱっとのれんをはじいて外へ出て見る。誰もいない。雨の音、強くなる。祭囃子が大きく聞える。

娘がいらないのを確かめてから傘を握り締め、中へはいってくる。雨の音、弱くなる。

次郎 親爺、傘を返すぞ。

ならず よう、よう、よう、よう、よう

椎名 と居酒屋のなかからあざけりの声が聞えた。

高橋 かわいい娘さんに傘が届けられなくて残念だったねー

次郎兵衛、番傘を振り上げ、ならずものに殴りかかろうとする。  
ならずもの、臆することなくすくと立ち上がって次郎兵衛の前に立ちはだかる。  
次郎兵衛、思い直して、傘を上手い具合に誤魔化しながら降ろし。

次郎 どうもありがとう。

それを亭主に返す。ならずもの、それを見て笑う。一緒になって次郎兵衛も笑う。  
笑い疲れた後、一人になって、

次郎 あああ。喧嘩の上手になりたいな。人間、こんな莫迦<sup>ばか</sup>げた目にあつたときには理屈もくそもないのだ。人に触れたら、人を斬る。馬に触れたら、馬を斬る。それがよいのだ。その日から三年のあいだ次郎兵衛はこっそり喧嘩の修行をした。

音<sup>in</sup>。

中村 喧嘩は度胸である。

椎名 次郎兵衛は度胸を酒でこしらえた。

中村 ええー？

次郎 オウエー。

中村 こんなんで度胸つくの？

椎名 つくつく。次郎兵衛の酒はいよいよ量がふえて、眼はだんだんと死魚の眼のように冷たくかすみ額には二本の油ぎった横皺が生じ、どうやらふてぶてしい面貌になってしまった。

中村 煙管<sup>きせる</sup>を口元へ持って行くのにも腕をうしろから大廻<sup>まわ</sup>しに廻して持って行って、やがてすぱりと一服すうのである。

椎名 度胸のすわった男に見えた。

中村 つぎにはものの言いようである。喧嘩のまえには何かしら気のきいた台詞を言わないといけないことになっているが、

椎名 次郎兵衛は台詞の選択に苦勞をした。

中村 型でものを言っては実際の感じがこもらぬし……。

次郎 おまえ、間違っではいませんか。冗談じゃあ、ないかしら。おまえのその鼻の先が紫いろに腫れあがるとおかしく見えますよ。なおすのには百日もかかる。なんだか間違っていると思います。



中村

今のはダメでしよ。

椎名

大丈夫、大丈夫。これをいつでもすらすらと言い出せるように、毎夜、寝てから二十へんずつひくく誦シヨウした。またこれを言っているあいだ必要以上に眼をぎらぎらさせたりせずにはほとんど微笑むようにしていたものだど、その練習をも怠らなかつた。

次郎

おまえ、間違ってはいませんか。

陽介

これで準備は整った！

中村

ほんとに？

陽介

いよいよ喧嘩の修行であった。まずこぶしの作りかたから研究した。次郎兵衛はいろいろと研究したあげく、こぶしの中に親指をかくしてほかの四本の指の第一関節の背をきっちりすきまなく並べてみた。そいつで自分の膝頭をとんとついでみると、

次郎

あつ

総員

発見！

陽介

こぶしは少しも痛くなくてそのかわりに膝頭のほうがあつと飛びあがるほど痛かつた。

次郎

あ、あつ、あつ、

陽介

次郎兵衛はつぎにその第一関節の背の皮を厚く固くすることを計画した。

椎名

朝、

陽介

眼をさますとすぐに家の裏手にあたる松林へ行つて、人の形をした五尺四五寸の高さの枯れた根株ねかぶを殴るのであつた。次郎兵衛は、もっぱら眉間と水落ちに相当する高さの個所へ小刀で三角の印をつけ、毎日毎日、

次郎

おまえのその鼻の先が紫いろに腫れあがるとおかしく見えますよ。

椎名

とたんにほかりほかりと眉間を殴る。左手は水落ちを。

次郎

なおすのに百日もかかる。

中村

この修行に一年を費やした

次郎

なんだか間違っていると思います。

中村

ともあれ、枯木の三角の印は腕くらの深さに丸くくぼんだ。

陽介

次郎兵衛はやつとおのれのこぶしの固さに自信を得た。

次郎

いまは百発百中である。

椎名

すごい。

次郎 けれどまだまだ安心はできない。相手は動いているのだ。  
中村 そりゃそうだ。

椎名 そこで、

陽介 次郎兵衛は水車へ眼をつけた。  
椎名 富士の麓の雪が溶けて水量のたっぷりな澄んだ小川となり、三島の家々の土台下や庭の中をとおって流れていて苔こけの生えた水車がそのたくさんの小川の要処要処でゆっくりゆっくり廻っているのだ。

陽介 次郎兵衛は夜、酒を呑んでのかえりみち必ずひとつの水車を征伐した。廻りめぐっている水車の十六枚の板の舌を、順々に殴るのである。

次郎、水車を殴る。

次郎 ばかりばかりばかりばかり、なんだか間違っていると思います。

中村 三年経った。大社のお祭りが三度来て、

椎名 三度すぎた。

陽介 修行が、終わった。次郎兵衛の風貌はいよいよどっしりとして鈍重になった。首を左から右へねじむけてしまうのにさえ……。

次郎兵衛、ゆっくりと振向く動作。

陽介 一分間かかった。

中村 肉親は血のつながりのおかげで敏感である。父親の逸平は、次郎兵衛の修行を見抜いた。

逸平 おまえさては……

次郎 なんです？

逸平 ははーん。

中村 何を修行したかは知らなかったけれど、何かしら大物になったらいいということにだけは感づいて、まえからのたくらみを実行した。

逸平 よしお前、火消し頭の名誉職を、引き継げ。

火消達 かしら、かしら、かしら、かしら

次郎 なあに？

椎名 次郎兵衛は訳のわからぬ重々しげなものごしによって多くの火消したちの信頼を得た。  
中村 喧嘩の機会はとんとなかった。

椎名 力のやり場に困って身もだえの果、とうとうやけくそな悪戯心いたずらこころを起し背中いっばいに  
刺青いれずみをした。

カポーンと音がして、風呂になる。

陽介 見た？

高橋 見た？

椎名 見た見た見た。

中村 あれなー

陽介 真っ赤な薔薇ばらの花を、鯖さばみてえな細長い魚が五匹、尖とがったくちばしで四方からつついてる

高橋 背中から胸にかけて青い小波さざなみがいちめんめんに動いていたぞ

総員 やべーなー。

椎名 この刺青のために次郎兵衛はいよいよ東曹道にかくれなき男となり、  
陽介 もはや喧嘩の望みは絶えてしまった。

次郎 ひょっとしたらもうこれは生涯、喧嘩をせずに死んで行くのかも知れない

陽介 若いかしらは味気ない思いをしていた。けれど機会は思いがけなくやって来る。

高橋 そのころ三島の宿に、鹿間屋と肩を並べてともに酒つくりを競っていた

中村 陣屋丈六

高橋 という金持ちがいた。ここの酒はいくぶん舌したったるく、

中村 色あいが濃厚であった。

高橋 丈六もまた酒によく似て、四人の妾めかけを持っているのにそれでも不足で五人目の妾を持  
とうとして様々の工夫をしていた。

中村 白羽の矢がおむかひの習字のお師匠の家の屋根へぐさどつきささった。

高橋 お師匠はかるがるとは返事をしなかった。二度、切腹をしかけては家人に見つけられて  
失敗したほどであった。

陽介 次郎兵衛はその噂を聞いて腕の鳴るのを覚えた。機会を狙ったのである。

椎名 三月目みつきに機会がやって来た。

高橋 十二月のはじめ、三島に珍しい大雪が降った。日の暮れ方からちらちらしはじめ間もなく大きい牡丹雪ぼたんゆきにかわり三寸くらい積もったころ、宿場の六個はんしょうの半鐘が一時に鳴った。火事である。

半鐘の音。音楽がそろそろと始まる。

椎名 次郎兵衛はゆったりゆったり家を出た。  
高橋 陣州屋の隣りの畳屋が気の毒にも燃え上がっていた。数千の火の玉小僧が列をなして畳屋の屋根のうえで舞い狂い、火の粉が松の花粉のように噴出してはひろがり、ひろがっては四方の空に遠く飛散した。  
椎名 降りしきる牡丹雪は焰にいろどられ、いっそう重たげにもったいなげに見えた。

陣州屋 おれの家へ水を入れるなんてのは、まっぴらだ。  
中村 いやしかし、陣州屋さん、

陣州屋 しかしもくそもあるかあ！ はやく隣りの畳屋むねの棟をたたき落として火をしずめたらいいじゃねえか。

中村 それは火消しの法にそむく  
陣州屋 知るか、そんなもん。やれよほら、はやく。やれよ、はやく。

椎名 そこへ！  
次郎 陣州屋さん。

曲in。もしくは乗り換え。

椎名 次郎兵衛があらわれた！

高橋 次郎兵衛はできるだけ低い声で、しかもほとんど微笑むねむようにして言いだした。  
次郎 おまえ、間違ってはいませんか。冗談冗談じゃあ、ないかしら。

椎名 この夜の次郎兵衛の様子はその後、ながいあいだの火消したちの語り草となった！  
中村 かしらはよ、火事のあかりに照らされながら陣州屋の野郎を、こう真正面に見据えて、

こうよ！ かしらのまっかな両頬ほに、十片じゅうぺんあまりの牡丹雪が消えもせずにへばりついて、それはもう、神様かみさまみたいに恐ろしかったぜえー！

次郎 おまえのその鼻の先が紫いろに腫れは上がるとおかしく見えますよ。なおすのには百日もかかる。

陣州屋　これはこれは鹿間屋の若旦那、へっへ、冗談です、まったくの酔興です、ささ、ぞんぶんに水をおいれ下さい。

次郎　：おまえ

火消し　おら、水だ水！

火消し　おーし、掛けるー！

動作をきっかけにして、音Out。

高橋　喧嘩にはならなかった。

椎名　次郎兵衛は仕方なく火事を眺めた。

中村　その翌る年の二月のよい日に、次郎兵衛は新居をかまえた。富士がまっすぐに眺められた。

椎名　三月の更によい日に習字のお師匠の娘が花嫁としてこの新居にむかえられた。

「なんのこっちゃい」の合唱。

次郎　これはまたこれで結構なことにながいないのだろう。な。

椎名　次郎兵衛は、なま悟りしてきよとんとした一日一日を送っていた。

逸平　これで一段落、

椎名　父親の逸平もそう呟いて、ぼんと煙管をはたいた。

逸平　それじゃお先に

火消し　おつかれさまです。

中村　けれども逸平の澄んだ頭脳でもってしてさえ思い及ばなかった悲しいことがらがあった。結婚してかれこれ二月目の晩のことである。

次郎兵衛ほどよく酔っ払っていい案配になっている。

次郎　おれは喧嘩が強いのだよ。殴りかたにもこつがある。こうして右手で眉間を殴りさ、こうして左手で水落ちを殴るのだよ。腕を、横から廻して殴るよりは腋わき下からピストンのようにまっすぐ突きだす、おい、ちょっとお待ちなさい。

陽介　ほんのじゃれてやってみせたことであったが、花嫁はころりところんで死んだ。

椎名　うそ！

次郎兵衛がゆっくりと起き上がる。

陽介　や、ほんとに。

中村

やはり打ちどころがよかったのであろう

陽介

次郎兵衛は重い罪にとわれ、牢屋へいれられた。ものの上手のすぎた罰である。

中村

次郎兵衛は、牢屋へはいつてからも同室の罪人たちから牢名主ろうなぬしとしてあがめられた。

椎名

ほかの罪人たちより一段高いところに坐らされながら、次郎兵衛は自作の都都逸どどいつとも念仏ともつかぬ歌を、あわれなふしで口ずさんでいた。

次郎

岩に囁く。

頬をあからめつつ。

おれは強いのだよ。

岩は答えなかった。

アルジ 売レマシタカ  
女の子 イイエ。

音in。

男 女の子の日本橋でのあきないは非常に少なかった。第一日目には、赤い花が一本売れた。二日目には、酔いどれの若い紳士が、一本買った。それだけであった。三日目は即ちきようである。つめたい霧のなかに永いこと立ち続けていたが誰も振向いては呉れなかった。

橋の向こう側にいる男の乞食が、松葉杖をつきながら、電車道をこえてこっちへ来た。女の子に縄張りのことと言いがかりをつけたのだった。女の子は三度もお辞儀をした。松葉杖の乞食は、まっくろい口髭を噛みしめながら思案したのである。「きょう切りだぞ」とひくく言って、また霧のなかへ吸い込まれていった。

女の子は間もなく帰り支度をはじめ、花束をゆすぶって見た。花屋から屑花を払い下げてもらって、こうして売りに出たから、もう三日もたっているのだから花はいい加減にしおれていた。重そうにうなだれた花が、ゆすぶられる度毎に、みんなあたまをふるわせた。

それをそっと小わきにかかえ、ちかくの支那蕎麦屋の屋台へ、寒そうに肩をすぼめながらは行っていった。三晩続けてここでワンタンを食べるのである。そのあるじは、支那のひとであって、女の子を一人並の客として取り扱った。彼女にはそれが嬉しかったのである。あるじは、ワントンの皮を巻きながら尋ねた。

アルジ 売レマシタカ  
女の子 イイエ。……カエリマス

男 この言葉があるじの胸を打った。帰国するのだ。きつとそうだ。と美しく禿げた頭を二度度かく振った。自分のふるさとを思いつつ釜からワントンの実を掬っていた。

女の子 コレ、チガイマス  
アルジ カマイマセン。チャシュウワンタン。ワタシノゴチソウデス

男 あるじは固くなって言った。ワンタンは十銭であるが、チャシュウワンタンは二十銭なのである。女の子は暫くもじもじしていたが、やがて、ワントンの小鉢を下へ置き、肘のなかの花束からおおきい蕾のついた青い花を一本引き抜いて、差しだした。くれてやるというのである。

アルジ ありがとうございます。

女の子 ドウイタシマシテ。なんなら、やりなおしますか？

アルジ ドウイウイミデスカ。

女の子 青い蕾が開いたらそれが貴方のもう一回。花と交代にあなたが蕾にもどります。ただし、お望みどおりとはかぎりません。

アルジ ナニカのおまじないデスカ？

女の子 おまじないじゃありません。仙術です。

男 と、いいさして、ふと言いよどんだ。本当はそんな力のある蕾なのかどうか、女の子にもわからなかったのである。ニホンでいちばんにぎやかなよい橋はニホンバシにちがいない、というおだやかな判断をした両親にいわれたまま、素直に花を売っていただけなのである。

女の子 嘘デス。普通の花デス。でもきっと咲きます。花ハ咲くものですから。

男 いうなり、ぱっと席を立てて店を飛び出した。彼女は電車の停留所へ行く途中、しなびかかった悪い花を三人の人に手渡したことをちくちく後悔した。突然、道端にしゃがみ込んだ。胸に十字架を切って、わけのわからぬ言葉でもって烈しいお祈りをはじめたのである。おしまいに日本語を二言囁いた。

女の子 咲クヨウニ。咲クヨウニ

花の咲く音。

アルジ 嘘ジャナイジャナイ。

「ジャンプ」

嘘の三郎

3人 嘘。

中村 嘘。

高橋 嘘。

中村 嘘。

高橋 う。

中村 そ。

高橋 う。



中村 そーん。嘘の三郎。むかし江戸深川に原宮黄村はらみやうそんという男やもめの学者がいた。

高橋 支那の宗教にくわしかった。

中村 一子があり、三郎と呼ばれた。

椎名 ひとり息子なのに三郎と名づけるとは流石に学者らしくひねったものだ

中村 と近所の取沙汰であった。

高橋 どうしてそれが学者らしいひねりかたであるかは判らなかつた。

椎名 そこが学者である、

高橋 ということになっていた。

中村 近所では黄村の評判はあまりよくなかつた。

高橋 極端にけちん坊であるとされていた。

椎名 ごはんをたべてから必ずそれをきっちり半分もどして、それでもって糊のりをこしらえる

中村 という噂さえあつた。

高橋 三郎の嘘の花はこの黄村の物惜しみから芽生えた。八歳になるまでは一銭の小使いも与えられず、支那の君子くんしじんの言葉を暗誦あんしやうすることだけを強いられた。

中村 三郎はその支那の君子人の言葉を水漬みずぼなすすりあげながら呟つぶやき呟つぶやき、部屋部屋の柱や壁の釘をぶすぶすと抜いて歩いた。釘が十本たまれば、近くの屑屋くずやへ持って行って一銭か二銭で売却した。

三郎 花林糖かりんとうを買うのである。

高橋 あとになって父の蔵書がさらに十倍くらいのよい価で売れることを質屋から教わり、一冊二冊と持ち出し、六冊目に父に発見された。

三郎 こんにちは。

黄村 はいこんにちは。

椎名 父は涙をふるってこの盜癖のある子を折檻せつかんした。こぶしでつづけざまに三つほど三郎の頭を殴り、それから言った。

黄村 これ以上の折檻は、お前のためにもわしのためにもいたずらに空腹を覚えさせるだけのことだ。それゆえ折檻はこれだけにしてやる。このようなことは二度としないと約束せい。

三郎 はい、もう二度といたしません。

高橋 三郎にとって、これが嘘のしはじめであった。

中村 その年の夏、

高橋 三郎は隣家の愛犬を殺した。

椎名 愛犬は狎ちんであった。夜、

椎名 狎はけたたましく吠えた。ながい遠吠えやら、きゃんきゃんというせわしない悲鳴やら、様様の鳴き声をまぜて騒ぎたてた。一時間くらい鳴きつづけたころ、

黄村 おい三郎、見て来い。

三郎 はい

高橋 起きあがって雨戸を繰くりあげ、見ると隣りの家の竹垣にむすびつけられている狎が、からだを土にこすりつけて身悶みもたえしていた。

三郎 騒ぐな、

椎名 狎は三郎の姿をみとめて、これ見よがしに土にまろび竹垣を噛み、きゃんきゃんと一そう高く鳴き叫んだ。三郎は狎の甘ったれた精神にむかむか憎悪を覚えたのである。

三郎 騒ぐな、騒ぐな、

高橋 と言ってから、庭へ飛び降り小石を拾い、はっしとぶつけた。狎の頭部に命中した。

椎名 きゃんと一声するどく鳴いてから狎の白い小さいからだぐるぐると独楽こまのように廻って、ぱたとたおれた。

中村 死んだのである。

高橋 雨戸をしめて寝床へはいってから、父は眠たげな声でたずねた。

黄村 どうしたのじゃ。

三郎 鳴きやみました。病気らしゅうございます。あしたあたり死ぬかもしれません。

中村 そのとしの秋、三郎はひとを殺した。

高橋 言問橋こととがはしから遊び仲間を隅田川へ突き落としたのである。直接の理由はなかった。ピストルを自分の耳にぶっ放したい発作とよく似た発作におそわれたのであった。

音in、銃声。

高橋 突きおとされた豆腐屋の末っ子は落下しながら細長い両脚あひるで家鴨あひるのように三度ゆるく空気を搔くようにうごかして、ぼしゃっ（と水面へ落ちた）。

SE、水ご落下する物体の音。

高橋 ややあって…、波紋のまんなかに片手がひよいと出た。

中村 こぶしをきつく握っていた。

高橋 すぐ、ひっこんだ。

三郎 あああああああああああああああああああ。

椎名 泣くでない、すぐ助けてやる。

中村 泳ぎに自信のある男が三人、競争して大川へ飛び込み、おのおの自分の泳ぎの型を誇りながら豆腐屋の末っ子を捜しはじめた。

高橋 三人ともあまり自分の泳ぎの姿を気にしすぎて、ようやく捜しあてたものは全くの死骸であった。

中村 三郎はなんともなかった。豆腐屋の葬儀には父の黄村とともに参列した。

高橋 十歳十一歳となるにつれて、この誰にも知られない犯罪の思い出が三郎を苦しめはじめた。

椎名 こういう犯罪が三郎の嘘の花をいよいよ見事にひらかせた。

中村 二十歳の三郎は神妙な内気な青年になっていた。

三郎 お盆になると必ず思い出すんです。母とふたりで夕涼みして墨田川の縁を歩いたものですよ。手つないで。疲れた、というとすぐ抱っこしてくれましてね。その胸のあったかかったこと。

椎名 今、お母様は？

三郎 母は、よく頑張ったんですけどね。それでも肺病のやつには……

椎名 ああ……ごめんなさい。

三郎 いえ、いいんです。

中村 けれど三郎は母を知らなかった。彼が生れ落ちるとすぐ母はそれと交代に死んだのである。

高橋 いまだかつて母を思ってみたことさえなかった。

中村 ひとに嘘をつき、おのれに嘘をつき、ひたすら自分の犯罪をこの世の中から、またおのれの心から消そうと努め、長ずるに及んで嘘のかたまりになった。

椎名 黄村のところへ教えを受けに来ている二三の書生たちに手紙の代筆をしてやった。親元へ送金を願う手紙を最も得意としていた。

中村 噂を聞いた江戸の書生たちは、若先生から手紙の書き方を教わりたい心から黄村に教えを求めた。

高橋 黄村の塾はそろそろと繁栄しはじめたのである。

中村 よろしくお願いしやーす。

三郎　こんなに日に幾十人ものひとに手紙の代筆をしてやっていたのではとても煩はんに堪えぬ。いっそ上梓しようか。これを一冊の書物にして出版しよう。

中村　ダメですよ、そんなことしちゃえ？

三郎　うちの親がそれを熟読したら、これは大変なことですよ。

椎名　困ります。

高橋　困ります。

中村　困ります。

高橋　勘弁してください。

三郎　わかった、わかったよ。

中村　それでも三郎は著述の決意だけはまげなかった。

椎名　そのころ江戸で流行の洒落本しゃれほんを出版することにした。

三郎　ほほ、うやまつてもうす、

椎名　というような書きだしで能あたうかぎりの悪ふざけとごまかしを書くことであって、三郎の性格に全くぴたりと合っていたのである。

中村　彼が二十二歳のとき酔い泥屋滅茶滅茶先生という筆名で出版した二三の洒落本は思いのほか売れた。或る日、三郎は父の蔵書のなかに彼の洒落本の傑作「人間万事嘘は誠」一巻がまじっているのを見て、何気なさそうに黄村に尋ねた。

三郎　滅茶滅茶先生の本はよい本ですか。

黄村　よくない

三郎　メチャメチャよくないですか。

黄村　メチャメチャよくない。

三郎　メチャメチャメチャメチャ

黄村　よくない。

三郎　あれはね、私の匿名ですよ。

黄村は狼狽ろうばいを見せまいとして高いせきばらいを二つ三つして、それから、

黄村　で、なんぼもうかったのかの。

女三人　傑作「人間万事嘘は誠」は、

高橋 嫌厭先生けんえんという年わかい世のすねものが面白おかしく世の中を渡ったことの次第を叙したものであって、

三郎 たたとえば嫌厭先生が花柳かりゆうの巷ちまたに遊ぶあそにしても或いは役者といつわり或いはお忍びの高貴のひとのふりをする。そのいかさまことがあまりにも工夫に富みほとんど真に近く芸者末社もそれを疑わず、  
黄村 はては彼自身も疑わず、

三郎 それは決して夢ではなく現在たしかに、一夜にして百万長者になりまた一朝めざむれば世にかくれなき名優となり  
高橋 面白おかしくその生涯を終わるのである。

椎名 死んだとたんに無一文の嫌厭先生にかえる、というようなことが書かれていた。これは謂いわば三郎の私小説であった。

中村 二十二歳をむかえたときの三郎の嘘は神に通じ、

三郎 黄村のまえではあくまで内気な孝行者、書生のまえでは恐ろしい訳知り、はたまた花柳の巷では即ち団十郎、なにがしのお殿様、なんとか組の親分、そうしてその辺に些少の不自然も嘘もなかった。

黄村 そのあくるとしに父の黄村が死んだ。(目を閉じる)  
三郎 眠ったふりをしているのではなかった。

音in。

中村 三郎は父の葬儀を近くの日蓮宗のお寺でいとなんだ。ちょっと聞くと野蠻なリズムのように感じられる和尚のめった打ちに打ち鳴らす太鼓の音も、耳傾けてしばらく聞いてみると、そのリズムの中にどうしようもない怒りと焦りとそれを茶化そうというやけくそなお道化どけとを聞きとることができたのである。

椎名 紋服を着て珠数じゆずを持ち背を丸くして坐って、三尺ほど前方の畳のへりを見つめながら三郎は黄村の遺書について考えていた。

黄村 わしは嘘つきだ。偽善者だ。支那の宗教から心が離れば離れるほど、それに心服した。それでも生きて居られたのは、母親のいないわが子への愛のためであろう。わしは失敗したが、この子を成功させたかった。この子も失敗しそうである。わしはこの子にわしが六十年間かかってためた粒粒ちゅうりゅうの小銭、五百文を全部のこらず与えるものである。

高橋 三郎はその遺書を読んでしまってから顔を蒼くして薄笑いを浮かべ、二つに引き裂いた。  
中村 それをまた四つに引き裂いた。  
椎名 さらに八つに引き裂いた。

高橋 空腹を防ぐために子への折檻をひかえた黄村、  
中村 子の名声よりも印税が気がかりでならぬ黄村、  
椎名 近所からは土台下に黄金の一ぱいつまった甕をかくしていると囁かれた黄村  
高橋 それがたった五百文ばかりの遺産をのこして大往生をした。

三郎 嘘の末路だ。

椎名 三郎は嘘の最後っ屁の我慢できぬ悪臭をかいたような気がした。

三郎 嘘は犯罪から発散する音無の屁だ。自分の嘘も、幼いころの人殺しから出発した。父の嘘も、おのれの信じきれない宗教をひとに信じさせた大犯罪から絞り出された。現実を少しでも涼しくしようとして嘘をつくのだけれども、嘘は酒とおなじようにだんだんと適量がふえて来る。次第次第に濃い嘘を吐いて行って、切磋琢磨され、ようやく真実の光を放つ。人間万事嘘は誠。人間万事嘘は誠。人間万事嘘は誠。

高橋 ふとその言葉がいまはじめて皮膚にべっとりくっついて思い出され、苦笑した。

三郎 これは滑稽の頂点である。

中村 黄村の骨をていねいに埋めてやってから三郎はひとつ今日より嘘のない生活をしてやろうと思いたった。

三郎 みんな秘密な犯罪を持っているのだ。びくつくことはない。ひけめを感じることはない。

高橋 嘘のない生活。

陽介 嘘のない生活。

高橋 う

陽介 そ

高橋 の

陽介 ない

高橋 せ

陽介 い

高橋 か

陽介 つ

二人 嘘のない生活。

黄村 その言葉からしてすでに嘘であった。

椎名 美<sup>よ</sup>きものを美<sup>よ</sup>しと言い、悪<sup>よ</sup>しきものを悪<sup>よ</sup>しという。

黄村 それも嘘であった。あれも汚い、これも汚い、と三郎は毎夜ねむられぬ苦しみをした。

中村 三郎はやがてひとつの態度を見つける。無意思無感動の痴<sup>ち</sup>呆<sup>ほう</sup>の態度であった。風のように生きることである。

高橋 三郎はそれから日常の行動をすべて暦のうらないにまかせた。たのしみは、毎夜、夢を見ることであった。

中村 青草の景色もあれば、胸のときめく娘もいた。

高橋 或る日の

中村 朝、

高橋 三郎はひとりで朝食をとっていながらふと首を振って考え、それからぱちっとな箸をお膳のうえに置いた。

三郎立ちあがる。

高橋 無意思無感動の態度が疑わしくなったのである。

三郎 これこそ嘘の地獄の奥山だ。意識して努めた痴呆がなんで嘘でないことがあるう。つとめればつとめるほど私は嘘の上塗りをして行く。勝手にしやがれ。無意識の世界。

女の子 「ジャンプ」

三郎 ジャンプ？

女の子 おまじないじゃありません。仙術です。

男 と、いいさして、ふと言いよごんだ。本当はそんな力のある蕾なのかどうか、女の子にもわからなかったのである。ニホンでいちばんにぎやかなよい橋はニホンバシにちがいない、というおだやかな判断をした両親にいわれたまま素直に花を売っていただけなのである。

女の子 嘘デス。普通の花デス。でもきつと咲きます。花ハ咲くものですから。

男 いうなり、ぱつと席を立てて店を飛び出した。彼女は電車の停留所へ行く途中、しなびかかった悪い花を三人の人に手渡したことをちくちく後悔しだした。突然、道端にしゃがみ込んだ。胸に十字架を切って、わけのわからぬ言葉でもって烈しいお祈りをはじめたのである。おしまいに日本語を二言囁いた。

女の子 咲クヨウニ。咲クヨウニ。

男 「ジャンプ」

男 三郎は朝っぱらから居酒屋へ出かけたのである。縄のれんをぱつとはじいて中へ入ると、この早朝に、もはや二人の先客があった。驚くべし、仙術太郎と喧嘩次郎兵衛の二人であった。太郎は卓の東南の隅にいてそのしもぶくれのもち肌の頬を酔いでうす赤く染め、たたりと下った口髭をひねりひねり酒を呑んでいた。

男 次郎兵衛はそれと相對して西北の隅に陣どり、むくんだ大きい顔に油をぎらぎら浮かせ、杯を持った左手を大廻しにゆっくり廻して口もとへ持って行って一口のんでは杯を口の  
高橋 の高さにささげたまましばらくぼんやりしているのである。

男 そのとき三郎は、もう随分とむかし異人の女の子から一輪の花を買い求めたことを思い出した。それは今日見た夢のようでもあったし、生れるよりもずっと以前に、どこか別の世界で体験したことのようにも思えた。——橋の名前。どうしたわけか、その他のことは、いま、眼前にみるようになりありと思いつけるのに、その女の子と出合った橋の名前だけが、すっぱり抜け落ちたように思い出せない。三郎は、二人のまんなかに腰をおろして酒を呑みはじめた。

高橋 三人はもとより旧知の間柄ではない。

椎名 太郎は細い眼を半分とじながら、

高橋 次郎兵衛は一分間ほどかかってゆったりと首をねじむけながら、

男 三郎はきよるきよる落ちつかぬ狐の眼つきを使いながら、それぞれほかの二人の有様を盗み見していた。

椎名 太郎と次郎兵衛も同じことを考えていた。

高橋 すなわち、どこか橋の上で異人の女の子から買った、あの花のことを思い出し、あの橋の名前を懸命に思い出そうと努めていたのである。

男 酔いがだんだん発して来るにつれて三人は少しずつ相寄った。奇妙な考えが三人の心の中にあった。となりで酒を飲んでこの男に聞けば、必ず橋の名前を聞き出すことができるはずだ。こらえにこらえた酔いが一時に爆発したとき、三人は一斉に声をあげた。

三人 ニホンバンだ!!!

男 長い長い沈黙のあと、三郎がまずまっさきに口火を切った。

三郎 こうして一緒に朝から酒を呑むのも何かの縁だと思えます。ことにも江戸は半丁あるく  
と他郷たきょうだと言われるほどの籠かごみあったところなのに、こうしてせまい居酒屋に同日同時  
刻に落ち合わせたというのは不思議なくらいです。

男 太郎は大きいあくびをしてから、

太郎 おれは酒が好きだから呑むのだよ。そんなに人の顔を見るなよ。



椎名　　そう言って手拭で頬被ほおかむした。

男　次郎兵衛は卓をとんとたたいて卓のうえにさしわたし三寸くらい深さ一寸くらいくぼみをこしらえて、

次郎　　そうだ。縁と言えば縁じゃ。おれはいま牢屋から出て来たばかりだよ。  
男　　と、答えた。

三郎　　どうして牢屋はいったのです。  
次郎　　それは、こうじゃ。

高橋　　奥のしれぬようなぼそぼそ声で次郎兵衛はおのれの半生を語りだした。

男　　語り終えてから涙を一滴ひとしずく、杯さかずきの酒のなかに落とすとぐっと呑みほした。三郎はそれを聞いてしばらく考えごとをしてから、

三郎　　なんだか兄者人のような気がする

男　　と前置きをして、それから自分の半生を語りだしたのである。それをしばらく聞いているうちに次郎兵衛は、

次郎　　おれにはどうも判らんじゃ、  
高橋　　と言っとうとうと居眠りをはじめた。

男　　けれども太郎は、それまでは退屈そうにあくびばかりしていたのを、やがて細い眼をはつきりひらいて聞き耳をたてはじめたのである。話が終わったとき、太郎は頬被りをたぎさうにとって、

太郎　　三郎さんとか言ったが、あなたの気持はよく判る。俺は太郎と言って津軽のもんです。二年前からこうして江戸へ出てぶらぶらしています。聞いて下さるか、

椎名　　とやはり眠たそうな口調で自分のいままでの経歴をこまごまと語って聞きかせた。

男　　だしぬけに三郎は叫んだ。

三郎　　判ります、判ります。

男　　次郎兵衛はその叫び声のために眼をさましてしまった。

次郎　　何事ですか、

三郎　　三郎はおのれの有頂天に気づいて恥ずかしく思った。

三郎　　有頂天こそ嘘の結晶だ、ひかえよう、

三郎・男　　と無理につとめたけれど、酔いがそうさせなかった。三郎のなまなかの抑制心がかえって彼自身にはねかえって来て、もはややくそになり、どうにでもなれと口から出まかせの大嘘を吐いた。私たちは芸術家だ。

三郎　　私たちは芸術家だ。そういう嘘を言ってしまったから、いよいよ嘘に熱が加わって来た。あの女の子は、日本橋でわれわれに花を売ってくれたあの女の子は嘘をついた。きつと思い通りにはならないといったけれどあれは嘘だ。

三郎

私たちは、思い通りだ。そうだ、私たち三人は兄弟だ。きょうここで逢ったからには、死ぬるとも離れるでない。いまにきつと私たちの天下が来るのだ。私は芸術家だ。仙術太郎氏の半生と喧嘩次郎兵衛氏の半生とそれから僭越せんえつながら私の人生と三つの生きかたの模範を世人に書いて送ってやろう。かまうものか。

男

三郎の嘘の火焰かえんはこのへんからその極点に達した。私は

「私たちは芸術家だ」繰り返すと、分解。

三郎

私たちは芸術家だ。王侯といえども恐れぬ。金銭もまたわれらに於いて木葉の如く軽い。

## 終劇